

U D L M

9

vol.337

September 30th

2023

自転車と都市・生活

9月の秋分の日も過ぎ、次第に夜風から秋の涼しさを感じ始めるようになってきました。
今後深まりゆく秋を見据えつつ、今月は日常の中での人々の自転車の使いこなし方を観察しました。

- p.2 自転車を利用したまちづくり
- p.3~5 本郷周辺での自転車利用
- p.6 2023 年度日本建築学会大会レポート
- p.7 都市デザイン研究室一門大集合！

△パークコート文京小石川前通路。路傍に停められた自転車、歩行者と自転車、車道走行を促す看板が入り混じる。

What is "15-Minute City"...

近年、環境配慮への要請やパンデミックに伴う新たなライフスタイルへの変容などの様々な背景から、自転車を軸としたまちづくりが世界各地で行われている。日本も例外ではなく、“Bicycle Urbanism” に代表されるように、街中や駅前の空間を新たなライフスタイルに応じて作りかえていく試みにおいて自転

車の観点を積極的に取り入れる潮流が生まれている。

いま、世界や日本では自転車を活用してどのようなまちづくりや研究が行われているか。その事例をいくつかピックアップして紹介していく。

"30m Heaven"

"30m heaven" とは標高 30m 地点で結べる東京都内の道路のルートを地図上に可視化したものである。調査の結果、このルートを経由して都内の広範囲の場所に行けることが判明した。この地図は、自転車にとって極めて快適に目的地に行けるルートとしても活用でき、最短経路に囚われない新たな自転車走行路を示唆するものとなる。(資料 1 より)



「自転車戦略」に基づくインフラ整備

デンマーク・コペンハーゲンでは 2025 年までに通勤・通学の自転車の割合を 50% 以上にするを目標に基盤整備が進んでいる。

▶混雑緩和のために設けられた歩行者・自転車専用道 "Lille Langebro"。毎日 11000 台以上の自転車が運河を渡る。(資料 2 より)



◀中心のターミナル「ノアポート駅」には自転車駐輪場が増設・整備され、現在は 2500 台が収容可能。駐輪場部分は周辺より 30cm ほど低くなっており、周囲の両サイドから乗り入れやすい構造になっている。(資料 3 より)

▼近郊の近距離電車 "S-tog" には自転車を置くスペースを設け、車内に自転車を持ち込めるように。(資料 3 より)



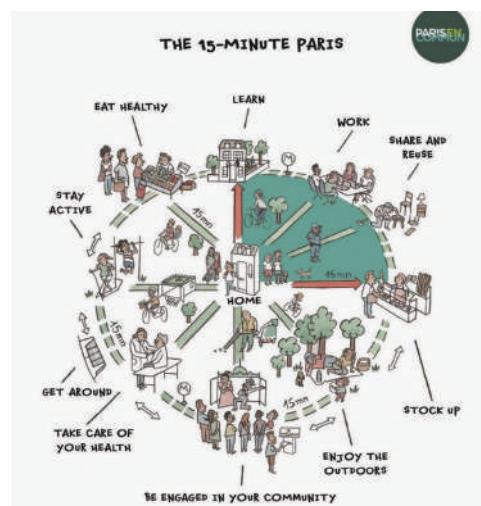
"15-Minute City" の今日における浸透

"15-Minute City" (以下『15 分都市』と表記) は、「自宅から徒歩・自転車などで 15 分で移動できる圏内にあらゆる日常的なニーズを満たすアメニティが存在する」という都市構想で、2016 年にソルボンヌ大学の Carlos Moreno 教授によって提唱された。

この考え方が世界中に広まったきっかけは 2020 年の COVID-19 のパンデミックであり、セカンドプレイスや便利施設へのアクセス喪失など生活の存続に関わる課題を前に喫緊の命題として扱われた。日本でもテレワークやそれに伴うコワーキングスペースが増加したように、身近なオープンエアな空間が多く設けられるようになった。

さらに、15 分都市の考え方は、都市施設の立地の問題だけではなく都市交通の自動車依存脱却も含まれている。実際にこの考えに基づく都市開発が世界的にも進んでいるフランスのパリでは、都市部の駐車場の撤廃ならびに自転車専用レーンの導入など、自動車から自転車への転換を目指す施策が行われている。

見方を変えると、自宅から日常生活のニーズを満たす場へ 15 分以内でアクセスできる物理的範囲を考えた場合、自転車は徒歩では難しい距離的制約を軽減するツールとして重要な役割を果たしているといえる。



「15 分都市」のダイアグラム (資料 5 より)。▲

画像出典

資料 1 : https://www.youtube.com/watch?v=P_3l3QmQI

資料 2 : <https://pressports.com/2022/07/28/copenhagen-cyclecity/>

資料 3 : https://project.nikkeibp.co.jp/mirakoto/atcl/global/h_vol7/

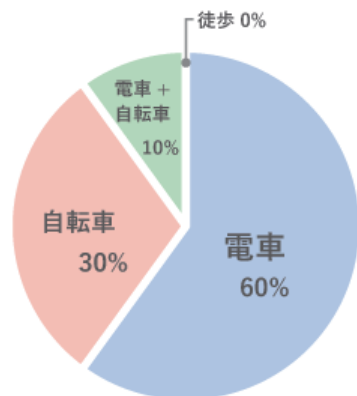
資料 4 : <https://www.flickr.com/photos/sotonobaplace/51945812908>

研究室生活と自転車の「今」

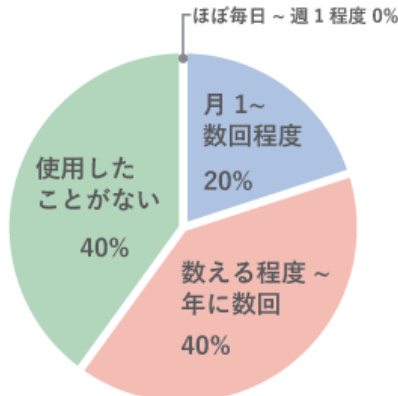
それでは、一番身近な研究室メンバーは大学生活において自転車をどれくらい活用しているのだろうか。自身の自転車で通学したり模型材料を買いに行ったりなど、自転車を使う場面が節々で見られる。また都市デザイン研究室には研究室共用のシェアサイクルがあり、それに乗って昼食を買いに行く人もいたりする。

今回は、そうした毎日において自転車をどれくらい使っているかの実態をマガジン編集部メンバー（M1：6人 M2：8人）にアンケート調査してみた。共用の自転車の存在を知らないメンバーも多数いることがわかったので、これを機に是非知って利用してみては？

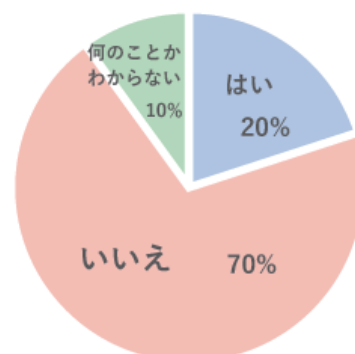
Q：通学の際の交通手段は？



Q：シェアサイクルを活用したことはある？
ある場合はどれくらいの頻度で利用している？



Q：研究室共用の自転車を
使ったことはある？



Q：普段どんな自転車に乗っている？



Q：自転車に乗る際、どのようなアイテムを
活用している？



普段はないです。
ロードバイクに乗る時はヘルメット、ライト、反射板、スピードメーターなどをつけていました。

ベルト：ダイソーの「べるりベルト」
スマホホルダー：防水タイプのを使っていて、雨の日でも使えて便利です。

アームカバー



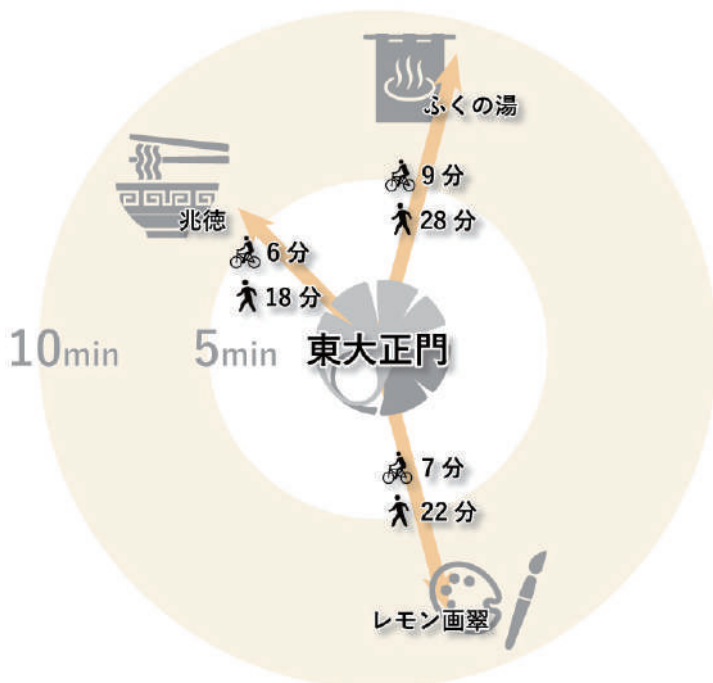
学生の本郷での日常を「自転車」から見てみる

「15分都市」は、徒歩や自転車の移動を日常生活の移動の中心に据えた考え方であった。しかし実際は自転車と徒歩では移動速度にかなりの差がある一方、自転車は駐輪場に停める手間や坂の上り下りの大変さがあるなど、移動の際には目的地による移動手段の使い分けや移動の快適さ度合いは時と場合によってさまざまである。

ここで、大学周辺の食事や買い物などで、自転車を使う際はどんな場所へ向かいどんな移動体験をするのだろうか。本号ではメンバーの自転車を使ったシーンから、自転車特有の都市での空間体験についてまとめていることとした。

▶今回の対象地は「レモン画翠」と「ふくの湯」の2箇所。ここは大学からの距離的に「徒歩で行くには少々長い」が自転車で行くにはちょうどいい早さ」という点が特徴的である。

実際のケース①、②それぞれにおいて、自転車がどのように使われているかを見ていこう。



Case 1：プロジェクトで模型制作をすることに...



歩いて向かう場合と比べてみると、
どのように違って来るかな...？

自転車で行ってみると、
どんな風景が見られる？

1 東大正門前～本郷通り



多くの飲食店があって人通りが賑やか。
たまに車が左折してくるから気をつけなきゃ。

2 本郷三丁目駅



正門からだここまで着くのが長くてもう歩き
疲れそう。ここから電車でたったの1駅。

電車に乗って移動...



3 東京メトロ 御茶ノ水駅



すぐに到着！信号を渡ればすぐそこ！
昼間は聖橋の上は通行人で一杯で通るのに
も一苦労...

1 東大正門前



ミーティングに必要な模型材料が決まった。
御茶ノ水へは電車より自転車の方が早い！

2 本郷通り



本郷通りを南下する。下り坂でスピードが出
てすすい進める！

3 荻坂上交差点



五差路での二段階右折で少し時間がかかる...

4 JR 御茶ノ水前



神田川を渡り、茗溪通りを東進、勾配のきつ
い坂でいい運動になる！途中いろんなお店が
出てきて見ていて楽しい。

5 ニコラス聖堂



突然鐘の音が！その方向を見てみると歴史が
ありそうな建物が...！！

8 東大正門前へ



帰りは少し上り基調だし、大きな袋が風を
受けて自転車がふらふらする...安全運転で
のんびり帰ろう

7 聖橋



行きとは違うルートで帰ろう、聖橋を渡る。

ここからは帰りのルート。
自転車に乗れるよう一度に
買う量は計画的に。



6 レモン画翠

ようやく自転車を止め終え、
レモン画翠へ！A2 ボードや
A2 黄ボールなどたくさん購
入。袋が大きい...！
持ちにくい袋を必死に抱え駐
輪場に向かう！



Case 2：ジュリー後に夜 mtg まで時間が空いたので ...

1 西片門



mtg まで時間が空いたので博士の人に教えてもらった中華料理店・兆徳と銭湯・ふくの湯へ行ってみることに。
西方門の階段で無理やり自転車を引き摺り大学の外へ。自転車重いなあ ...

2 本郷通り



徒歩の友人と共に行くので自転車を押して歩いていく。

4 ふくの湯



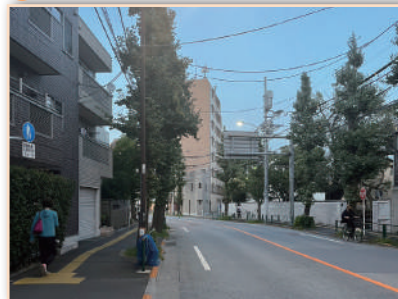
ご飯を食べた後友人と別れ銭湯へ。錆びた自転車で行くとほんの少しの登り道がしんどい。

3 兆徳



近くに自転車を停めて店内へ。ここの炒飯と揚げ餃子が美味しい！

5 ふくの湯～帰路



風呂でゆっくりしすぎて mtg に遅れそうになり少し飛ばす。風呂上がりに自転車を快走させて浴びる風が心地よい。

6 東大前のコンビニ



mtg の時間になるも喉が渇きセブンイレブンに寄り道。全力で漕いで大学に戻る。



自転車を使ったらこの時間でどこまで行ける？

2m ならかな傾斜



そもそも歩きの場合だったら ... ?

1 東大正門前



mtg まで時間が空いたので研究室の同期に教えてもらった近くの飲食店へ行ってみることに。

2 もり川



本郷郵便局の隣なのですぐに到着。周辺に銭湯はないので mtg 終わって家に帰ってからにしよう。

まとめ：自転車からの都市のみえかた

今回の調査から、自転車の有無による移動の仕方の違いがいくつか見えてきた。もっとも大きな変化は移動範囲の拡大である。徒歩で 20 分以上かかる場所では自転車の方が早いといった感覚を持つ傾向が見られた。さらに銭湯に関しては立地上正門前から最も近い銭湯でも 20 分かかるため、自転車を持つことが「風呂に入る」という行為を視野に入れる条件として機能しているともいえる。

また、徒歩の際には殆ど注目されない道路の傾斜や高低差が走行感覚に大きな影響を及ぼす点も特徴的である。同様に自転車は徒歩より強い風を受けるため、風心地も「走りやすさ」を大きく左右する要素である。他にも、自転車の場合は駐輪場に必ず寄る必要があるため、出発地から目的地までのルートだけでなく、目的地近くの駐輪場の立地もアクセシビリティの良し悪しに大きく関わる。そうした自転車特有の移動の特徴と都市内の起伏などの要素を把握したうえで上手く自転車を乗りこなしていくと、今の都市をより楽しく快適に住みこなせるかもしれない。

2023 年度日本建築学会大会レポート

2023 年 9 月 12 日～15 日にかけて、京都大学にて、2023 年度日本建築学会大会が開催されました！今回は新型コロナウイルスの感染拡大以降、4 年ぶりとなる対面開催でした。都市デザイン研究室からは 6 名のメンバーによる発表がありました。6 名に、論文の概要と、発表を終えての感想を聞きました。

博士研究

日本統治時代初期の台湾台北県における内地人流動商店（露店）の発生とその管理について

○三文字昌也・中島直人

論文の概要

日本統治時代初期（1895-1900）の台北において、日本人による露店営業が当初から多かったという状況と、露店や商店が組合化して夜市営業の当局の許諾を得るまでの経緯を、新聞等の史料から明らかにした。

発表を終えて

時間的範囲も空間的範囲も絞った発表だったのですが、現代台湾の夜市に続く一つのキープポイントとなる出来事だったと思うので、建築学会大会の場で発表できて良かったです。都市デザイン研究室一門飲みもすごかったです。



露店営業者出店手続（1898 年）における認可場所（「最近實測臺北全圖・附圓山附近」(1903 年) に筆者追記）

博士研究

南沢学園町における地域形成理念の形成・展開（1945 年以降）

自由学園を核とした地域における地域形成理念の形成・展開に関する基礎的研究その 2

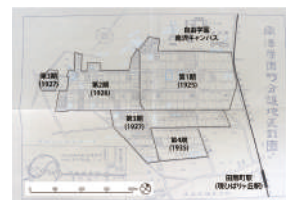
○玄田悠大・永野真義・中島直人

論文の概要

近代以降に形成された地域や建築物の保全・継承を目的に、自由学園が郊外の南沢（現・東久留米市、西東京市）に形成した学園町の形成・変容を、地域の形成理念に着目して分析。結果、同地域の環境保全・継承には担い手やコミュニティ、自然、建築物等を通じて重層的に理念が継承されたことが要点であることが分かった。

発表を終えて

学会大会という普段とは異なる環境に身を投じて行うことで、改めて研究を整理できたように思います。縁のある京都大学での発表は不思議な感覚でしたが、リアル開催が戻ったことで全国から集った関係者と昼夜交流でき、その意味を強く実感した機会でした。



博士研究

在郷町としての富山市八尾と周辺農山村間の人流・物流関係の史的考察

自動車普及以前の交通インフラ整備履歴に着目して

○柴田純花・中島直人

論文の概要

富山市八尾を対象に、自家用車普及以前の交通インフラ整備履歴に着目して周辺農山村の往来の実態を分析した。生業や産業が交通インフラ整備に影響を与えていたこと、旧八尾町外から八尾への往来が衰退したことを明らかにしている。

発表を終えて

司会の吉江先生から、在郷町研究に取り組む意図について掘り下げて質問いただきました。梗概は量も発表時間も短いですが、学会は自分の研究テーマを発信し関心を持っていただく場であると改めて感じました。



ルンビニ PJ

考古学遺跡の発掘と保存計画の同期的実施のための方法論

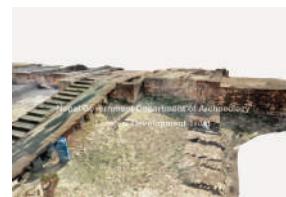
○森屋友佑・永野真義・黒瀬武史

論文の概要

ネパールのティラウラコットでは、世界遺産の登録に向け、地中遺跡の考古学調査が進んでいる。現地の状況と同期しながら、観光計画と建築・土木デザインを修正する「同期的プロセス」を達成するための、情報共有のあり方について議論した。

発表を終えて

初の建築学会大会参加でしたが、セッション数の多さ・参加者の多さにとにかく圧倒されました。そして、あらゆる分野の知見を得たこと、各地方から集まる友人と話せたことで、大いに刺激を受けました。



上野 PJ

都心歓楽街における夜間路上テラス席の利用運営実態

東京都台東区上野「仲町通り道路利活用社会実験 2022」を対象として

○高野楓己・永野真義・中島直人・阿子嶋翔・橋俊輔

論文の概要

夜の街上野の中幅員街路における社会実験を対象に、交通安全面、治安面、滞留の多様性、継続可能性の観点から日常化の可能性と課題を考察した。テラス席設置は客引きを牽制する効果があった。今後は許可範囲の明確化の必要性がある。

発表を終えて

初めての学会発表でした。スライドを添削いただく中で、聞き手に伝わるよう表示方を熟考する大切さを学びました。上野 PJ の皆さんには学会の準備計画諸々助けていただき、本当にありがとうございました。



卒業研究

まちあるきを通した地域資源の認知および地域評価の変化が地域愛着に与える影響に関する研究

藤沢市片瀬地区の住民を対象として

○小林夏月・高見沢実・野原卓・矢吹剣一・尹莊植

論文の概要

住民を対象にまちあるきを実施し、アンケート調査と撮影調査より、地域資源の認知状況や地域評価の変化が地域愛着に与える影響、ならびに地域資源の発見や再評価の手法としてのまちあるきの有効性や課題について研究しました。

発表を終えて

初めての学会+対面発表だったのでとても緊張しました！他の人の発表を聞いたり、懇親会で他研究室の学生と話したりする中で、修士研究に対するモチベーションも上がっているので勢いそのまま頑張りたいです。



▲京都滞在中の写真

都市デザイン研究室一門大集合！

建築学会大会の2日目である9月13日の夜に、都市デザイン研究室ご出身の先生方とその学生が集う「一門飲み」が開催されました。今回は50名を超える参加者数となりました。一門飲みの最後に、窪田亜矢先生（東北大学）、宮城俊作先生、中島直人先生（東京大学）からスピーチをいただきました。本号では中島先生のスピーチを紹介します。

【 各研究室に共通する部分は、都市デザイン 】

これだけ広がりのある異なる研究室の人が集うということ自体がとても面白かったです。各研究室のテーマ、所属する学科は建築や都市計画から、都市生活、政策、観光まで様々だけれども、そこに何か共通する部分があるのでしょうか。それはやはり都市デザイン研のDNA、都市デザインであってほしいと思いましたし、実際にその存在を感じました。

【 丹下研と都市デザイン研の繋がり 】

私自身はつい最近、この都市デザイン研のDNAを改めて考える機会がありました。『地域開発』のこの9月号に、大学院生を誘って議論し、東京大学都市デザイン研究室の名前で「再読：丹下研の国土を捉えるアーバンデザイン」という原稿を書かせていただきました。60年代の丹下研は、1961年の『東京計画1960』に始まり、1971年の『21世紀の国土』に至る時代ですが、正直この時代の丹下研の業績というのは、自分たちの取り組んでいることとはあまり関係がないと思っていました。というのは、丹下さんは「オーガニゼーション・マン」に代表される、ある種の典型的なタイプの人間をマスを想定し、人間の文明史感、工業化社会から情報化社会へという極めて大きな歴史観に基づいて、丹下研として都市から国土までをデザインの対象としていったわけですが、正直、今の都市デザイン研が取り組んでいるような、一つひとつの地域で、個性があって、そこに暮らしている人たちがそれぞれの暮らし、固有の人生を過ごしているということに基盤を置く考えとは距離がある、ある種の断絶があるのではないかと考えていたのです。だから、この時代の丹下研についてあまり共感をもって考えたことがありませんでした。しかし、今回の原稿依頼があってちゃんとこの時代の丹下研の成果を見ていくと、すでに70年代初頭の丹下研の思考の中に、都市デザインはどうあるべきか、先を見据えて変えていくという意志が見えてきました。当時の丹下研やURTECの若いメンバーが議論している記録があ

ります。それを見ると、情報化社会がゴールなのではなく、その次には一人ひとりが、個々の創造性を持って、自分の人生を過ごしていくような、一人ひとり固有性がある、そういう人たちが主役になる社会が来るんだ、我々はその社会を導くような仕事をするんだということを語っています。その記録を読んで、60年代の丹下研と今我々がやっていることが実は連続していることに気づきました。丹下研自体は時代にしっかり反応していて、70年代初頭には都市デザインを変えようという意志をもち、それを丹下先生の後の大谷先生、渡邊先生、西村先生がその意思を受け継ぐようにこうした方向に持っていってくれたのだということが、自分の中で実感できました。やはり我々のルーツとしての丹下研があって、その後の都市デザイン研への流れというのは、自分達の視点の持ちようや問題意識によっては、自分のやっていることの中の根拠の一つになるとか、自分たちが歴史を紡ぐことで、自分たちの今やっていることに繋げていくことができるのではないかと実感したのが、この原稿を書いた際の経験でした。

【 丹下研のレガシーを生かす 】

我々が共有しているのは丹下研から始まっている、ある種の都市デザインの研究室の財産、レガシーであって、ここに集う我々はそれを直接活か

せる幸運な立場にいるのだと思います。人から聞いたり、誰かがなんとなく言っていたという理解だけではなくて、歴史のなかで、歴代のメンバーたちが何を本当に考えて、何に取り組んでいたのかということ、自分の問題意識を後に見ていくことで、この財産は自分のものになる。皆さんにとっては、きっと私や皆さんの先生方もそうした歴史の対象なのかも知れませんが、ぜひ、年に1回集まった時には、このネットワークの根幹にある都市デザインの価値や歴史に対して思いを馳せて、それを自分の研究とか実践に活かしてほしいと思います。ぜひこれからも、この交流会が毎年、1年に1回くらいは自分たちの歴史的な位置のようなもの考える機会になってくれば、とても有意義な時間になるのではないのでしょうか。東京大学の都市デザイン研は元気にやっています。スタッフとしては永野先生と青木先生と私と3人で、昨年度まで研究室を牽引して下さった宮城先生に比べれば圧倒的に経験不足の3人ですが、頑張って、都市デザインとは何かということを実践と研究で示していきたいと思っています。そこはご安心ください。皆さんはそれぞれの研究室で、自分一人一人がそれぞれの研究室の歴史をつくっていくんだという気持ちで頑張ってください。ありがとうございました。



▲集合写真（会場となった「ピアホール ミュンヘン」前にて）

COLUMN

POSTSCRIPT

今月号の「自転車」というテーマを選んだ背景の一つに電動スクーターの法規制緩和がある。実際まちを自転車で行くとレンタサイクルやスクーターなど既にマイクロモビリティが気軽に都市で使える基盤が整いつつあることを実感した。これらによる今後の都市の様相の変化を考える上で、自転車という昔ながらのモビリティを通じた都市の観察も大切にしていきたい。

9月号担当
M1 音山尚大



WEB MAGAZINE

流鏝馬祭り 体験ルポ



富士吉田プロジェクト

富士吉田の小室浅間神社で850年の歴史を持つ流鏝馬祭に参加しました！祭り前一週間は「潔斎」といって、参加者が神社内で生活を行い身を清めます。女人禁制などユニークな祭の詳細はHPで！（M2 伊藤）

続きはコチラ >>>
<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ia/blog/>



青空のまちにわWS



宇治プロジェクト

まちにわWS第6弾を開催しました！子どもたちを中心にたくさんの方に訪れていただきました。昨年雨で実施できなかったミニ運動会「まちにわカップ」も、晴天に恵まれた今回は大盛り上がり！（M1 山田）

BOOK OF THE MONTH



図面でもとく名建築

五十嵐太郎・菊地尊也・
東北大学五十嵐太郎研究室
編著
丸善出版
2016

歴史的建築から近代・現代建築まで、66の事例から図面を読み解いていく解説書。Q & A形式で各部の工夫や設計者の思想をゲーム感覚で学ぶことができる。頭の中で空間を想像し、設計に隠された意図を読み解く面白さを教えてくれた一冊。（M1 小林）